うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌
第17号
発 行 日：平成15年1月31日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷（株）

美しさゆえに消えゆく

深山の草陰にひっそり咲くイチヨウラン（写真上）。もともと多い植物ではないようですが、自生地の開発や山野草マニアによる採取などによって、富山県では絶滅危惧種になってしまいました。愛好者の多いエビネ（写真右）も、めったに見られなくなり、同じく絶滅危惧種に。花は、自生地で見るのが一番美しいと思うのですが…。

レッドデータブックを読む

学芸員 石須秀知

レッドデータブックとは、ある地域で絶滅の危険性がある、もしくはすでに絶滅してしまった生物を記載した本です。「ある地域」とは、一つの山や川、自治体、国から地球レベルまでさまざまな設定があります。昨年、富山県自然保護課から「富山県の絶滅のおそれのある野生生物・レッドデータブックとやま」という本が発行されました。

このレッドデータブックで植物について見ると、絶滅種18、絶滅危惧種90、危急種94、希少種115、情報不足59、合計376種が掲載されています。現在富山県内で記録されている植物はおよそ2700種なので、そのうちの約14%、ほぼ7種に1種は何らかの原因で生存が脅かされ、あるいは既に絶滅したということになります。

ところで、「ある生物が一つの地域で絶滅しても、他の地域に残っていれば問題ないのでは?」という人もいます。果たしてそうでしょうか。

生物は、外見の形に差がなく、同じ種だと判断されていても、持っている遺伝情報が異なる場合があります。突然変異などで生じた新しい遺伝情報は、近接した地域の仲間とは交配によって伝達・共有することができます。しかし、まったく交配の可能性のない遠い地域の仲間とは遺伝情報の交換ができないため、長い時間の中で地域ごとに特有な遺伝情報が蓄積されていきます。その結果、同じ種でも、地域ごとに持っている遺伝情報は異なり、種全体として遺伝子は多様になります。ある種が一つの地域で絶滅した場合、その仲間が別の地域で生き残っていても、絶滅した地域特有の遺伝情報は失われ、種全体の遺伝子の多様性が低下します。そうすると、その種全体の環境への適応力も弱くなり、極端な場合、温暖化などの環境変化で種そのものが絶滅する可能性もあります。

また、絶滅はその種だけの問題ではありません。自然の生態系は、多種多様な生物が相互に複雑に関係しながら成り立っています。一つの種が絶滅するということは、生態系を構成しているメンバーが欠けるということです。多くの場合、1種だけの絶滅ならば、生態系全体には目に見えるような影響は現れないかもしれません。しかし、だんだんと複数の種が絶滅し、生態系を支えるメンバーが減っていけば、どこかの時点で一気に生態系が崩壊するおそれがあります。そして、一度崩壊してしまった生態系は、人間の力では二度と復元することができないのです。

では、これら絶滅のおそれのある生物に対して、私たちができることは何でしょうか。レッドデータブックに掲載された種がどこかで見つかると、「保護!」という声があがります。しかしそこには数々の難問があります。園芸価値のある植物の場合、生育地を公表したり、「○○を採らないで」という看板を立てたりすれば、盗掘を助長することにもなりかねません。かといって、その存在を知らせなければ、知らずに傷つけられたり、開発で生育地ごと消えてしまう可能性もあります。また、「保護」というとその種だけに目が行きがちですが、その種を含めた生態系を健全に保つ環境の「保全」「維持」という考え方が必要になります。たとえば里山のように、人間の手が適度に入るこ

とで保たれる自然もあるので、「自然を保つため、この山の木を切ってはいけない」と単純に言うこともできません。つまりその種と、生態系や人間をも含めた環境との関係を見極め、適切な方策を見出す必要があるのです。それにはまず、絶滅のおそれのある生物の現状を正しく把握することが急務です。

さて、富山県のレッドデータブックに照らして、魚津市の現状はどうでしょうか。魚津埋没林博物館では、郷土の自然を把握する一環として、市内の植物相の調査も行っています。調査はまだ途上ですが、現地調査や文献調査などを合わせ、およそ1500種の植物が記録され、うちレッドデータブックに載っているものは約70種です。その中には、アケボノスミレ、ミシマサイコ、スズサイコなど絶滅種もあります。過去10年以内の現地調査で確認できているのは30種前後で、残りのものも将来の再発見を期待していますが、もしかすると魚津市では絶滅している可能性も否定できません。近年確認できたものには、オオフジシダ、エビネ、イチヨウラン、ヒトツボクロなど絶滅の危険性が特に高い絶滅危惧ランクのものや、アオフタバランなどレッドデータブックの原稿ができたあとで生育地を発見したものも含まれています。

全国の多くの地域のレッドデータブックの作成過程で、地元の自然の情報が集まる博物館が重要な役割を果たしています。私たちの博物館も、郷土の自然の将来に貢献できるよう調査の継続に努力していきたいと思っています。

アオフタバラン（情報不足）

ギンラン（危急種）

センブリ（危急種）

オオフジシダ（絶滅危惧種）

シリーズ

埋没林の仲間たち ⑯

ノブドウとブドウ属（ブドウ科）

ブドウ科の仲間の多くは、林の縁などの日当たりのよい場所で、他の植物に巻きひげをからみつかせながら生育する、つる植物です。

ノブドウは道端などにもよく見られ、秋に白、紫、瑠璃色などさまざまな色の実が目を楽しませてくれますが、食べられません。また、寄生昆虫によっていびつに膨れた実もよく見られます。ノブドウは、ノブドウ属に分類され、ヤマブドウなどが属するブドウ属とは異なるグループの植物です。

ブドウ属は山地に多く、富山県で普通に見られるのはヤマブドウ、エビヅル、サンカクヅルの３種

ノブドウ

です。この３種とも、秋になると小粒ながらいかにもブドウらしい黒紫色の実がなり、食べられます。味は、木によって、あるは時期によって酸味が強いことがありますが上々で、山歩きのおやつに最適です。

エビヅル

＊　＊　＊

現在の魚津市では、ノブドウは平野から山地に、ブドウ属の３種は山地を中心に生育しています。エビヅルは海岸でも確認されています。

魚津埋没林では、平成元年の発掘調査でノブドウの種子、ブドウ種の種子と花粉が検出されています。

お知らせ

●平成15年度の行事予定

☆企画展示

蜃気楼写真展	５月１日～６月30日
宇宙へのいざない	７月１日～８月17日
埋没林と温暖化	８月18日～10月14日
トンボの一生	10月15日～11月15日
魚津の美しい自然と祭写真展	11月16日～12月28日
魚津ナチュラルギャラリー④	１月２日～３月31日

☆ふれあい学習会

四葉のクローバーを探そう	５月24日(土)
魚津と周辺のスギをめぐる	７月19日(土)
森の工作と味作りに挑戦	９月27日(土)
もみじで楽しく葉書づくり	10月25日(土)
つるつるつくる	11月15日(土)

※企画展、学習会の詳細は下記までお問い合わせください。

ご利用案内

○開館時間　午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
○休 館 日　12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
○入 館 料　・大人(高校生以上)・・・510円　・小中学生・・・250円
○交　　通　・JR北陸本線 魚 津 駅
・富山地方鉄道 新魚津駅　下車1.5km（タクシー・・・５分　徒　歩・・・25分）
・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物　魚津埋没林博物館
〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765)22-1049
ホームページ　http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/
e-mail　nekkolnd@city.uozu.toyama.jp